

住民・学生・専門家の協働によるポケットパークづくり その1 —新潟県三条市につくる里山の回廊—

The construction of pocket park by the collaboration of inhabitants, students and professionals.

石向 良成*4, 西村 伸也*1, 櫻井 典子*2, 棒田 恵*3,
工藤 裕*4, 野澤 明美*4, 樋口 雅希*4, 渡辺 恵*4
Yoshinari ISHIKO*4, Shin-ya NISHIMURA*1, Noriko SAKURAI*2, Satoshi BODA*3,
Yu KUDO*4, Akemi NOZAWA*4, Masaki HIGUCHI*4, Megumi WATANABE*4

新潟県三条市において、学生・住民・専門家との協働によるポケットパーク整備に着目し、「協働のまちづくり」の課題を探ることを目的としている。初年度の活動では、大学院の授業で基本コンセプトの決定を行い、その後実際に整備を行った。1年を通しての活動の仕方、情報の共有や活動日程の調整などの面で住民・大学・行政・専門家、それぞれの課題が明らかになった。

Keywords Sanjyo city, Town planning, Collaboration, Pocket park, Satoyama
三条市、まちづくり、協働、ポケットパーク、里山

1. はじめに

1-1. 研究活動の背景と目的

現在多くの地域で様々な住民参加型の「まちづくり」が行われている。それらは、住民が自発的に行うものや行政主体で行われるもの、まちづくり NPO が主体となるものなど様々な形態がある。本稿では、学生が活動に参加し住民との協働により、都市の環境整備を進めている新しい形態に着目する。

新潟大学大学院自然科学研究科と新潟県三条市弥彦線沿線地域による『協働のまちづくり』を取り上げる。この活動は、大学院の授業を通して弥彦線沿線地域の環境整備を実際に行うもので、平成 19 年度より活動が始まった。本稿では、学生と住民が主体となり活動を継続的に行っていくために必要であると思われる協働の課題を探ることを目的とする。

1-2. 対象地の概要

新潟県三条市は新潟県のほぼ中央に位置し、金物の

まちとして栄えた都市である (fig.1)。現在の三条市は、平成 17 年に旧栄町、旧下田村と合併した。三条市の市街地を東西に横断するように全長 1 8 0 0 m 程の弥彦線高架下緑道がある (fig.2)。弥彦線は平成 9 年に高架式鉄道としての運行が開始され、その際、高架下が緑道として整備された。平成 10 年に緑道沿いの環境整備及び利用促進のために 11 箇所のポケットパークが設けられた (fig.3)。

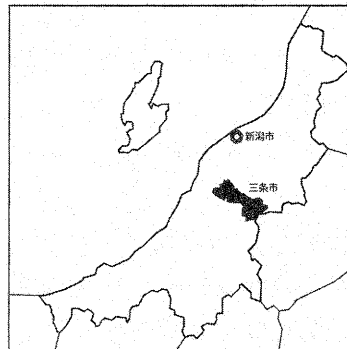


fig.1 対象地域

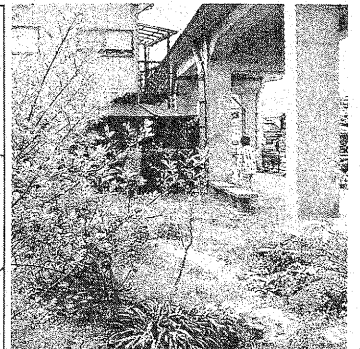


fig.2 弥彦線高架下緑道

*1 新潟大学工学部 教授・工博 Prof., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

*2 日本女子大学 学術研究員 Researcher., Japan Woman's Univ.

*3 新潟大学大学院 博士後期課程・工修 Graduate school of Eng., Niigata University. M. Eng.

*4 新潟大学大学院 博士前期課程 Graduate school of Eng., Niigata University.

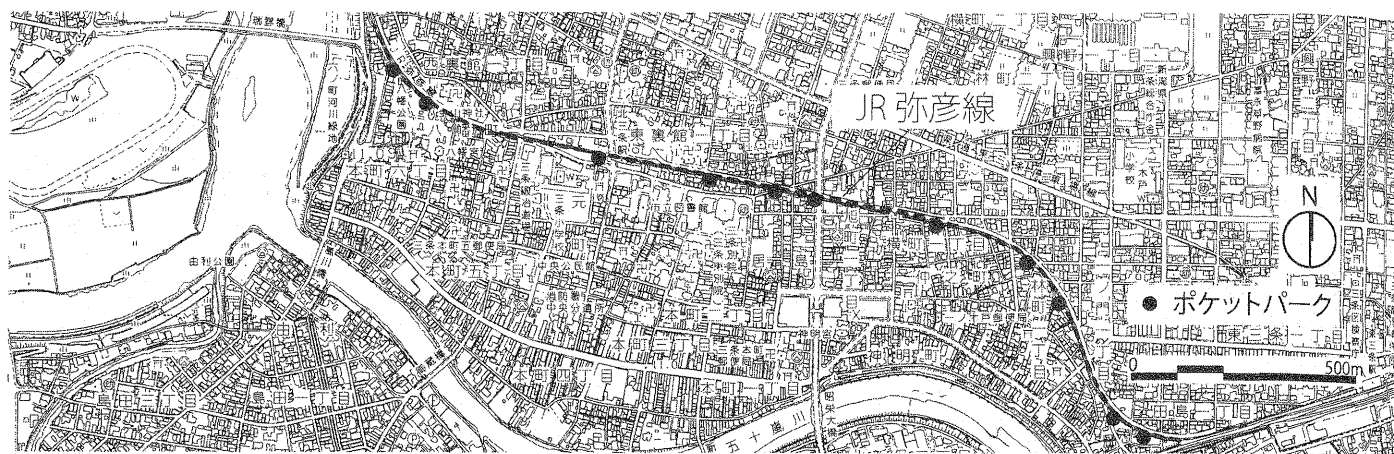


fig.3 ポケットパーク配置図

2. 活動概要

2-1. 活動の始まり

平成 10 年にポケットパークとして整備され、各ポケットパークのある自治会に管理は委託されていた。しかし、状況は様々で住民により有効的に利用されているとは言えない場所になっていた。そこで、市は市民活動が盛んな土地柄を活かし、協働のまちづくりにより整備を行い地域を活性化したいと考え、大学に協力を依頼したことにより活動が始まった。

2-2. 初年度の活動 (fig.4)

本活動はポケットパーク 11 箇所の内、8 箇所を年 1 箇所ずつ 8 年間に渡り継続的・一体的に整備する予定である。そのため、基本コンセプトが必要であり、初年度に限り大学院の前期の授業（建築計画・設計学特論 担当：西村伸也）で基本コンセプトの検討・決定を行い、決定後試行的に新潟大学工学部西村研究室と住民の協働により計画・整備することになった。

2-3. 参加者

活動立上げ時の参加者は弥彦線沿線地域の住民・PTA（3 学区）・市民団体・専門家・新潟大学大学院生であり、アドバイザーとして新潟大学農学部紙谷教授も参加し、活動を進めた。

3. 基本コンセプトの検討・決定

基本コンセプトの検討・決定は、授業を履修した新潟大学大学院の学生 21 人と住民で行った。学生 2、3 人と住民により 8 チームを組み、活動を進めた。

1) まち歩きの実施

学生と住民が顔合わせを行い、チーム編成後 11 箇所のポケットパーク、弥彦線沿線地域を回り周辺環境についての説明を受けたり、基本コンセプトのヒントを探した (fig.5)。

2) 基本コンセプトの検討

学生が住民のお宅に伺い、まち歩きで感じたことや周辺環境、三条市について調べたことなどをふま基本コンセプトの検討を行った (fig.6)。

日時	活動内容
	大学での活動の始動
5月 07/05/11	三条市役所が大学にてレクチャー
05/30	三条にて自治会長への説明
6月 06/08	授業
	活動の始動
06/18	実行委員会の立ち上げ
06/20	農学部教授によるレクチャー
06/27	大学にて各班のテーマ発表
7月 07/01	まち歩き
07/18	授業でまち歩きを踏まえての発表
8月 08/19	中間発表
08	班ごとに三条を訪問、テーマ案の検討
9月 09/08	全体テーマ発表
09/12	住民間でのレクチャー
	整備テーマの決定
09/22	全体テーマ決定に向けた調整
09/30	全体テーマの決定
	今年度整備箇所の決定
	計画案の検討
10月 10/13	7号ポケットパーク整備レクチャー (中間発表)
11月 11/10	7号PP整備計画決定 大崎山にて植物の選定
	ポケットパークの施工
12月 12	施工に向けたディテール調整
1月 2008/01	業者による工程調整
2月 02/16	三条にて工事着工前説明
02/19	墨だし
02/23	盛土、掘削
02/24	ベース
3月 03/02	基礎
03/08	ベンチ据付
03/09	水路の石の取り付け

fig.4 初年度活動概要



fig.5 住民と学生のまち歩き

fig.6 住民宅での話し合い

3) 中間発表

各チームごとに考えた基本コンセプトの案を発表し、各チームの案の可能性や問題点を共有し意見交換を行った。三条らしいものにして欲しい、地域の産業・歴史を知る場所にして欲しい、子供を考慮したデザインにして欲しいという要望が多くあった。

4) 最終発表

中間発表で指摘された問題点について再度まち歩きをしたり、専門家の意見を聞くなどし、再検討した基本コンセプトについてプレゼンテーション、質疑応答を行った。その後、全チームの案を並べ自由にディスカッションを行い、それぞれの案に関して理解を深めた。それぞれのチームの実現できる部分と実現が難しい部分が明らかになった (fig.7,8)。

6) 基本コンセプトの決定

実現できるいいアイデアをできるだけ多く汲み上げよりよいものを作りたいという考えから、基本コンセプトの決定は投票ではなく、話し合いによって行われた。また、基本コンセプトと具体的な整備イメージが混同されている部分もあったため、話し合いを重ねながら基本コンセプトを決定した。決定した基本コンセプトは、緑道全体を緑の回廊としてデザインしていくというものである。緑の回廊を作る際には、新しい緑との関わり方を提案するため、三条の地場の緑を大切にする、三条の本来の緑を知るという考えから三条の里山の緑を街の中に移植することとなった。

4. デザインの検討・決定

整備箇所を決定し、現地における実測調査を経てデザインを開始した。里山の緑を移植するという基本コンセプトに基づき、さらに、ものづくりのまちとして栄えた三条の鍛冶や金属加工の伝統技術を活かし、計画を行った。

1) デザインに関しての話し合い

デザインは住民の要望を聞き、学生が基本計画を行った。まずはじめに、里山を移植するというコンセプトからどのようにデザインしていくかを検討する場を設けた。デザイン案を数案提示し、それぞれの案に対して問題点を共有するための話し合いが行われた (fig.9)。問題点として、隣家への視線の配慮が挙げられた。しかし、基本コンセプトの認識の違いから材料や施工方法に関する議論に多くの時間が割かれた。

2) デザイン案のイメージ決定

三条市には多くの里山があるが、デザインを進める中で最も市民に知られ、親しまれている大崎山の緑を移植することとし (fig.10)、住宅が密集している街の中

1	○まこてば〜ひと・まちリンク〜 ポケットパークで取れた植物の種を家庭の庭や小学校に。 ○ 軸の交点
2	人やものや情報が流れる「ネットワーク軸」古くから生活を支えてきた「コミュニティ軸」の交点に位置するポケットパークの使い方。
3	○夜でも地域の安心空間 高架下が面的に繋がる 『植栽』、『照明』、『広報』をキーワードに高架下を面的につなげる。
4	○安心して遊べる公園づくり〜守られながら地域に開いている〜 『寺社の境内の雰囲気』をつくり出すことにより、子供の遊び場、市民のたまり場として。
5	○三条みずの長屋計画 ポケットパークに『みみずコンポスト』を設置し、生活から出る生ごみを肥料化。ポケットパークを通じて環境に配慮した循環型生活を提案。
6	○三条らぐがきストリート〜子供の「らくがき」から始まる世代間交流〜 ポケットパークを『らくがき』公園とし、子供→大人→子供の世代間交流を図る。笑顔で賑わうらくがきストリート。
7	○三条の街の断面線 『街の断面』を気付かせるための『視点を変える装置』に。
8	○緑の回廊と健康公園 ポケットパーク間で緑のネットワークを構築することにより三条の市街地を『緑の回廊』として囲む。ポケットパークに健康器具を置き、健康公園の要素を持たせる。

fig.7 基本コンセプト案

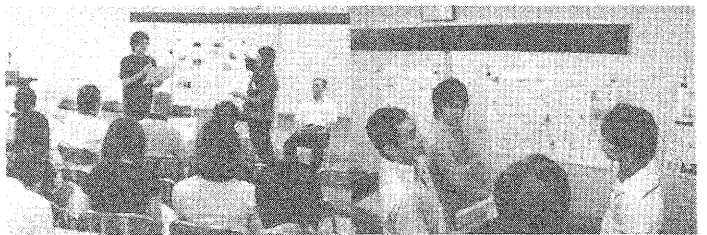


fig.8 基本コンセプト最終発表

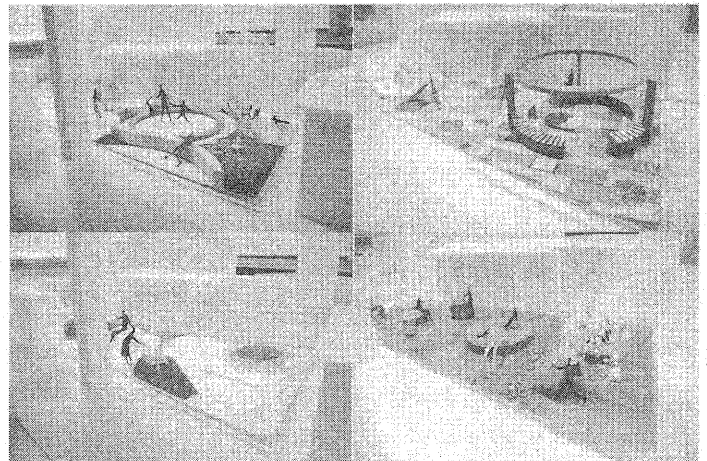


fig.9 デザイン案

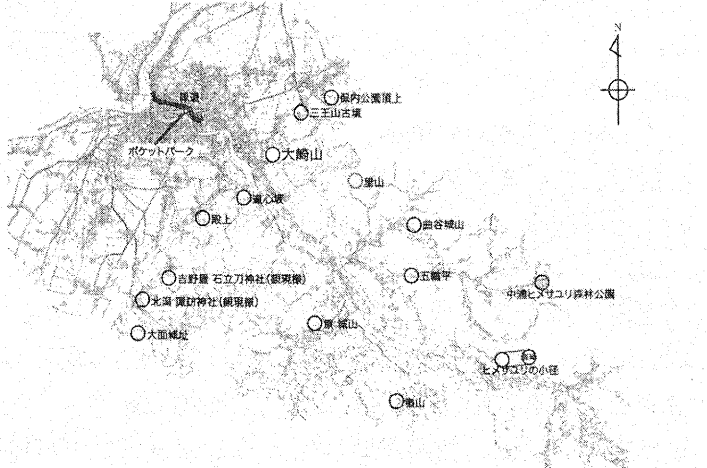


fig.10 里山とポケットパークの位置

で里山を意識できるように里山とポケットパークを結ぶ軸線を設け、関係性を作ったことにより、具体的な基本計画が決定した。緑を植える築山を3つ作り、ベンチと花壇が一体となったものを合わせて計画した。三条の産業・歴史を取り入れるということで、ベンチの座面の留め具として和釘を用い、子供が参加できる工夫として床面に石のラインを計画した。全体的には了解を得ることができたが、住民から隣家への配慮やバリアフリーに対する配慮をさらにして欲しいという要望がありデザイン変更を行うことになった (fig.11)。

5. 施工

デザイン案決定後、木や植物の種類を住民・学生・専門家（樹木医、園芸組合）・新潟大学農学部紙谷教授・市職員が数回大崎山を訪れ選定した (fig.12)。

隣家への配慮として、常緑樹の本数を増やすことにより視線が抜けないようにし、バリアフリーに関しては新潟県福祉のまちづくり条例の基準に照らし合わせデザインの変更を行った (fig.13,14)。

実際の整備では、住民・学生が専門家（三条市建設業組合青年部など）の協力のもと作業に参加している。また、三条工業会より和釘、三条市内の電気店より照明、土砂販売業者より山砂などの寄付といった地域からの協力を得て整備を進めている (fig.15-20)。

6. 活動における課題

住民側の課題として、本活動には弥彦線沿線地域の11の自治会から住民が参加しており日常的に住民同士の交流があったわけではない。初年度ということもあり、情報の共有と活動の運営の面で住民が一体となれていなかったという部分が挙げられる。また、参加している沿線地域の住民は自治会関係者が多く、広報誌による広報活動によって、多くの一般住民を巻き込んだ活動に展開していくことが必要である。

大学側の課題としては、半期の授業であるため、1年を通しての参加の仕方が明確になっていない点がある。また、緑や施工に関して必要とされる知識が不足しているため補う必要がある。

そして、行政側の課題としては、活動への関わり方を模索している段階であり、役割が明確になっていないことがある。

また、専門家がボランティアであるため、基本的には土日しか作業が行えず進行が遅くなることがある。ボランティアが三条市建設業組合青年部や保内園芸組合などの組合による参加のため、新陳代謝が常に起こってよい反面、作業が断片化するということが課題である。



fig.11 デザイン案最終発表

fig.12 木・植物の選定

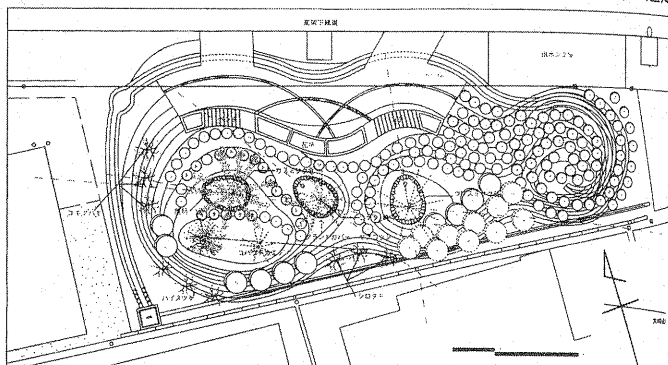


fig.13 最終計画案

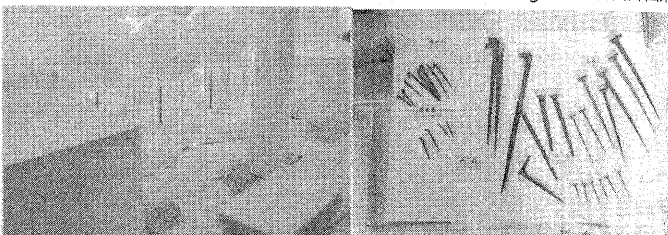


fig.14 最終計画案模型写真

fig.15 和釘

2月												3月											
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9
土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
住民・学生												専門家											
樹木・植物												和釘											
ベンチ												花壇											
水路												照明											
その他												その他											

fig.16 工程表

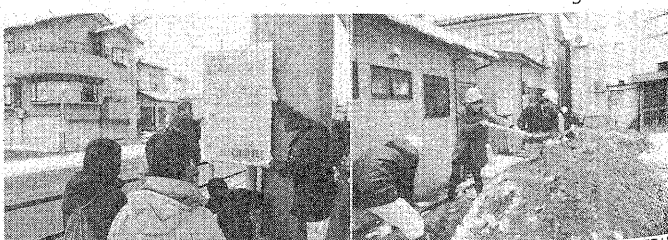


fig.17 看板の設置

fig.18 丁張り



fig.19 ベンチの設置

fig.20 水路の位置出し